**自著紹介**

**『心の正体見たり　教養人に与うる書』への招待**

　5章から成る本書に通底するのは「心という実体（事物）は実在しない」です。各章は約30分で読めますが、それぞれ驚嘆すべき展開があり、深く考えると、際限なく時が過ぎゆきます。しかし、それは高次教養レベルへのステップです。高い教養は、高い生存価を意味します。以下、章順に紹介します。

　「愛は映ろう」では、心の同義語としての愛とは何かを問います。愛は物ではないので、贈り物のように届けることはできません。愛は生物ではないので、「愛が生まれる」は字義通りに解釈できません。しかし、愛と呼ばれる反応が存在することは確かです。では、そもそも、潜在的には無数の対象の中で、特定の人が愛妻や愛人になったり、特定の犬や車や本が愛犬、愛車、愛読書になったりするのはなぜでしょうか。その答えは9-14頁にあります。また、なぜ愛妻や愛犬や愛車を失うと非常につらいのでしょうか。その答えは19-22頁です。

　「ことばと比喩と心」では、比喩に満ち満ちた「心」を見直します。「心が広い」とか「心が折れる」などは比喩表現です。その原義が何かを考えると、心の正体が見えてきます。一方、漱石は「心」ということばを使わずに『こヽろ』が書けたかもしれません。なぜなら「心」は不要だからです。「心」が実体として実在しないので、多くの文脈で不要であるとも言えそうです。

　「心と体」は、デカルトの二元論への反論を繰り広げます。「心が体を動かす」と言いますが、心が非物体であれば、非物体が体という物体を動かすことは不可能です。一遍上人の「いにしはこヽろのままに従がいぬ　今はこヽろよ我に従へ」という謎めいた歌について、大岡信は「『従へ』と命じる者はまさに心のはず？　もし心でないなら誰？」と問いかけました。その答えは、74-8頁にあります。

「感情をとらえる」では、感情と呼ばれる対象が無数にあると主張します。無限の刺激に対する反応をことばで情緒豊かに表現し、それらを感情と呼びます。心理学者はそれらを分類しようとしますが、無限をすっきりと分類することは不可能です。ただし、比較的とらえやすい感情もあります。たとえば、怒りです。怒りについて、134頁では「すぐ怒る者は … 教養がない」と述べています。付言すると、この怒りは公憤ではなく、私憤です。私憤を顕わにする者は、教養が低く、よって、生存価も低いと言えます。しかし、いまだ現代人が怒りを内包していることは、そこに生存価があるのではないかという疑義が生じます。いえ、その生存価は古代の残影であり、現代社会では、無用の長物です。現代社会でも、すぐ怒る独裁者や悪徳企業の社長が残存しますが、やがて自然淘汰される運命にあります。

　「幸せをたずねて」では、人間の究極の性向を論じます。人は皮膚の内外にある刺激に対して反応します。その反応は、肯定、中立、否定の3種類しかなく、そのうち肯定反応が幸せです。幸せは心のありようではありません。体の肯定反応です。それを意識するとき、幸せだと表現します。現代教養人は、否定刺激を避け、肯定刺激を求めようとする姿勢を本章から読み取ってほしいです。

本書は、アカデミックベストセラーをめざして執筆しました。自分の心に関心をもつ教養人が100万人いて、その1-10％が買ってくれるなら、所期の目的の達成です。2023年７月18日の朝日新聞サンヤツ広告が出て、順調に進むと思いきや、現実は厳しいです。その答えも第１章にあります。一目ぼれは稀です。二目ぼれ、三目ぼれ、… ｎ目ぼれ、ｎが大きくなれば、ほれる確率が高まります。本稿は、その一目分です。1回きりの効果は低くとも、近未来にどこかで2回、3回を経験すれば、もしくは2度、3度と本稿を反復してもらえるなら、効果は高まるのですが…。